タイムリーで適切な情報共有のためにもっとICTを活用しよう

～つるかめ診療所のIPW（多職種連携）の取り組み～

今号の特別企画では、つるかめ診療所が多職種連携勉強会「つるカフェ」を練習の場として、地域の専門職がMCSを活用できるまでになった経緯を、鶴岡浩樹さんに報告していただきます。ICT化を進めるヒントを学びましょう。

はじめに

つるかめ診療所は栃木県南部の下野市に位置し、看取りも含め24時間365日体制で在宅医療を行っています。下野市は人口6万人の農村地帯で、市内に自治医科大学附属病院を有する農業と医療の町です。当院は2007年に自宅の一室を診療所として開業しました。医師夫婦2人だけで運営しているので、多職種連携（Interprofessional work: 以下IPW）は開業当初から切実な課題でした。在宅チームの構成メンバーは、すべて他事業所の専門職だからです。互いに医療や介護の専門職とはいえ、機関が異なると言葉や認識にも差があり、各機関の思惑も絡み、IPWの実践は簡単なようで難しいものです。

このような状況の中、当院では早期からソーシャル医療プラットフォーム「メディカルケアステーション（MCS）」を導入して、IPWを実践してきました。本稿では、ICTを活用したIPWの取組や、どのように地域の専門職たちを巻き込んだのか紹介したいと思います。

1. 多職種連携勉強会「つるカフェ」

振り返れば、開設時よりIPWに力を入れてきたつもりでした。地域の専門職の顔はもちろん知っているし、電話や書面のやりとりも当たり前のように行い、サービス担当者会議も積極的に参加しました。しかし、2011年3月11日に起きた東日本大震災という未曾有の災害は、その程度のつながりでは対応できないことを気づかせ、私たちにたくさんの教訓をもたらしました。連絡手段が途絶える中で、さまざまな出来事に遭遇し、改めてIPWを見つめ直す機会となりました。

これを機に、2011年6月、現所長の鶴岡優子医師が中心となり「顔が見える以上にお茶する関係」をスローガンに「つるカフェ」という名の多職種連携勉強会を始めました。お茶を飲みながら楽

執筆▶鶴岡浩樹（つるおかこうき）◉ 日本社会事業大学専門職大学院 教授
つるかめ診療所 副所長

1993年、順天堂大学医学部卒業。自治医科大学地域医療学教室、ケース・ウェスタン・リザーブ大学留学、自治医科大学附属病院総合診療部外来医長を経て、2007年に栃木県につるかめ診療所開設。2013年より日本社会事業大学専門職大学院教授。新宿区在宅医療専門部会会長、東久留米市在宅医療介護連携推進協議会会長。医学博士。家庭医療専門医。